國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『新古今和歌集』酒井宇吉氏旧蔵本上帖の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 荒木, 優也
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000660

國學院大學図書館所蔵『新古今和歌集』酒井宇吉氏旧蔵本上帖の解題と翻刻

荒木優也

『新古今和歌集』は、多くの写本が今日まで伝来するものの、その諸本系統は必ずしも明確に分けられるものではない。それは、『新古今和歌集』が成立過程の途中から流布し、更にそのいろいろな段階の本文が混交したり、校合されたりして書写されたことによる。そういった事情や写本の多さから、『新古今和歌集』諸本を考えるためには何らかの方針で調査範囲をしぼることも求められよう。その方針の一つとして、書写時期が古い諸本（鎌倉期～南北朝期）に限定して本文を見るということも必要と考えられる。今回、翻刻して紹介する酒井宇吉氏旧蔵本（以下、「酒井本」と略す）も鎌倉後期と書写時期が古いことから、その比較に寄与すべき本と言えよう。

酒井本は、『新編国歌大観』収載の異本歌一覧で「酒井宇吉氏蔵本」と神田の古書肆一誠堂書店の主人酒井宇吉氏の名を冠して紹介されている本で、のちに武田祐吉博士所蔵、博士没後に本学図書館に寄贈された。旧蔵者として判明している一人として保阪潤治氏がおり、保阪氏に送られた松田武夫氏の書簡が一緒に伝来する。[註] また、保阪氏所蔵の昭和十二年には重要美術品に認定されており（旧重要美術品）、その認定書も現在にいたるまで付されている。現在は、

本学図書館デジタルライブラリーにおいて公開されている。

伝来する二帖のうち、上帖は真名序（冒頭1丁分を欠く）・仮名序（7丁と8丁のあいだに2丁分欠く）・巻一から巻四までのほぼ全体と巻五の一部、下帖に巻十六～二十の大半を収め、巻六から巻十五までの本文は欠く。また、現存する各巻も落丁などのために欠脱歌が多い。下帖には選者名注記があるが、上帖には見られない。また、上下帖で筆者が異なり、和歌本文の一面行数も上帖が九行、下帖が十～十三行、下帖のみ巻末歌が六行散らし書きにされている。これらのことから、上下帖で性格の違う本文であるものと考えられるため、上帖を本号、下帖を次号において別々に翻刻・紹介することとした。上帖の書誌は、以下の通りである。

〈外　題〉ナシ　〈内　題〉「新古今和謌集巻第一」（巻二～四は「和歌集」とする）
〈巻　冊〉五巻一帖　〈保存状況〉前半部破損甚大
〈体　裁〉綴葉装。枡形本。　〈書写年代〉鎌倉時代後期
〈表　紙〉渋引表紙　〈表紙寸法〉縦一五・六cm×横一五・四cm
〈字　高〉十三・八cm　〈見返し〉表紙共紙
〈一面行数〉真名序一面八行、仮名序一面九行、和歌本文一面九行（例外あり）。
〈丁　数〉九折一〇五丁、うち遊紙首一丁。
〈奥　書〉ナシ　〈印　記〉「國學院大學圖書館印」
〈　箱　〉印籠蓋箱（蓋表右上に「廿五番」と書かれた貼紙あり）
折毎の丁数も以下に示そう。一折目（右4丁＋表表紙・左3丁）、二折目（右7丁・左7丁）、三折目（右7丁・左

7丁）、四折目（右7丁・左7丁）、五折目（右7丁・左7丁）、六折目（右5丁・左5丁）、七折目（右7丁・左7丁）、八折目（右7丁・左7丁）、九折目（右2丁・左2丁＋裏表紙）であり、一折目のみ左右で丁数が違っている。

本文系統としては、切継期の本文を反映している本文と考えられる。切継期とは、『新古今和歌集』編纂途中の本文であり、定稿した『新古今和歌集』には収録されない、編纂段階で除かれた和歌（切り出し歌）が含まれる。酒井本が有する切り出し歌は一九七九・一九九八番歌の二首であり、特に巻四秋上三一八番歌の次に見られる一九九八番歌「なれぬれはつらき心もありやとてたなはたつめのたれにちきりし」は他本に見られない歌であるため重要である。また、両序の本文には、問題となる異文は確認できない。

書写態度としては、必ずしも丁寧なものではなく摺り消しや重ね書きが認められる。また、脱字や確定しがたい文字もあり、それらは後筆で補筆されたり「〜か」と注記されたりしている。酒井本では、和歌が二行書きされているが、その改行は第三句と第四句の切れ目で行われているとは限らず、意味の切れ目でなされているわけでもない。特に法則性も認められない。これは、おそらく意味よりも筆跡の流麗さのほうが重視されたからであろう。脱字や確定しがたい文字が多く認められるのもそこに理由が求められるものと考えられる。巻三（夏）の二二七・二二八番歌が料紙の裏丁を切り取る形でなくなっていることは、酒井家本の筆跡が重宝されたことを暗示するであろう。

また、酒井本上帖には、多くの落丁が認められる。

●巻四（秋上）四三五・四三六、巻五（秋下）四三七〜四九三（101丁と102丁のあいだ）

●巻五（秋下）五〇六〜五一六下句（103丁と104丁のあいだ）

●巻五（秋下）五二六〜五五〇（最終丁105丁のあと）

ほかに見られない歌としては、巻一（春上）の八七〜九二番歌があり、後筆で八六番歌の歌頭と九三番歌の末尾に

○印が付され、そのあいだに歌があることが示されている。これらの歌の不在が認められる箇所は丁の途中であり、落丁から生じたものではない。そういった意味でこれらの歌の不在は切継期の本文として重要なものとも考えられるが、不在の理由として親本の落丁部分であった可能性も考えられる。なぜなら、親本を改丁する際の目移りによって生じたと考えられる誤写が酒井本の丁の途中に認められるからである。たとえば、二七番歌の前にある「源重之」は本来二八番歌の作者名である。そのため、後筆で28番歌に入る旨を示した挿入符が「源重之」の上と二八番歌の歌頭に丸印で書き込まれている。また、20番歌は作者名として「中納言家持」（15オ）とありながらも改行した裏丁（15ウ）には「読人不知」とも記されている。ちなみに次の21番歌は「読人不知」である。こういった目移りが生じるのは、酒井家本が親本とは違った行配り、改丁で書写したからであろう。そのため、八七～九二番歌は親本段階の落丁を反映させたと考えるのが妥当であろう。ただし、三〇番歌のように一首単独で見られない歌（後に補筆）もある。そのため、他の伝本において切り出し歌ではない歌の収載されない場合、どのような理由で生じているかを検討する必要もあるだろう。このことについては、また後日に考察したい。

註　『武田祐吉博士旧蔵善本解題』（角川書店）では、鈴木淳氏が解題を担当している。

【凡例】

一　以下は、國學院大學図書館蔵『新古今和歌集』二帖（貫１８５６～５７）のうち上帖の翻刻である。翻刻に際して、以下のような処理を施した。

一　行配りなど出来るだけ原本に近い形になるように示した。

一　歌の末尾に『新編国歌大観』の歌番号を（　）で示した。ただし、切り出し歌に関しては〔　〕で歌番号を示す。

一　漢字、仮名ともに通行の字体に改めたが、「哥」など一部原本の字体を尊重した箇所がある。

一　使用した記号は左記のとおりである。

〰〰（右傍浪線）……摺消（　）内はもとの文字、（　）がないものは不明。

――（右傍直線）……重書（　）内はもとの文字、（　）がないものは不明。

――（左傍直線）……見消

□……破損部分。ただし文字が判読できるものは四角囲みでその文字を示した。

一　原本に見られる○で書かれた挿入符などは・に統一した。

一　当該本には、字形があいまいなため確定しがたい文字がある。その場合の多くは、本文右傍に後筆で「～か」と注記されるが、それ以外にも確定しがたい文字がある。そのため、稿者がもっとも近い字を示した横に（～カ）と丸括弧して注記した場合がある。また、判読しがたい字は●で示した。

一　後筆で和歌や詞書が小書で補写されている場合、（＊小書一行）と示した。それらは原本ではすべて一行に収まっているが、紙面の都合から二行にわたっている場合がある。

〈白　紙〉

或吟或詠抜犀象之牙角無[覓]
无偏採翡翠之羽毛裁成而得
二千首類聚而為廿卷名曰新古今
倭謌集矣時令節物[之]篇[屬]□
序而星羅衆□[雜]詠什□□□
而雲布綜緝之致蓋云備矣伏惟
来自代邸而践天子之位謝於
漢宮而追汾陽之蹤
今上陛下之厳親也雖無隙帝道
之諮[詢]日域□□之本主也争不賞
我國之習俗方今荃宰合躰華夷
詠仁風化之樂万春々日野之草悉
靡月宴之契千秋々津洲之塵
惟静誠膺無為有截之時可頤染
毫操箋之志故撰斯一集永欲傳
百王彼上古之万葉集者蓋是倭哥
之源也編次之起因准之儀星序惟
邈煙鬱難披延𡚁有古今集四人

」〈2オ〉

〈白　紙〉

」〈1オ〉

藤原雅[経][等]不[擇]貴賤高下令
摭錦句玉章神明之詞佛陀之
作為表希夷雅而同隷始於曩昔
迄于當時彼此総編各俾呈進毎至
玄圃花芳之朝璅砌風涼之[夕]斟
難波津之遺□□浅香□□□□

」〈1ウ〉

」〈2ウ〉

」〈3オ〉

含綸命而成之天暦有後撰集
五人奉絲言而成之其後有拾
遺金葉詞華千載等集雖出於聖
王数代之最勅殊恨為撰者一身之
最因茲訪延喜天暦二朝之遺美
定深河歩虚五輩之英毫排神
仙之居展刊脩之席而已斯集
之為躰也先抽萬葉集之中更
拾七代集之外深索而微長無遺
廣求而片善必舉但雖張網於山
野微禽自逃雖連筌於江湖小鮮偸
漏誠當視聽之不達定有篇章
之猶遺今只随採得且所勒終也
抑於古今者不載當代之御製自
後撰而初加其時之
天章各考一部不満十篇而今所
入之自詠已餘三十首六義若相
兼一両雖可足依無風骨之絶妙

」〈3ウ〉

」〈4オ〉

還有露詞之多加偏以耽道思不
顧多情眼凡厥取捨者嘉尚之餘
特運沖襟伏義（羲カ）号基皇徳而四十萬
年異域自雖観聖造之書史焉
神武開帝功八十二代當朝未
聴叡策之撰集矣定知天下之
都人士女謳謌斯道之遇逢矣不獨
記仙洞無何之郷有嘲風弄月之
興亦欲呈皇家元久之歳有温故
知新之心修撰之趣不在茲乎聖暦
乙丑壬春三月云尓

」〈5オ〉

〈白　紙〉

」〈5ウ〉

やまと哥はむかしあめつちひら
けはしめて人のしわさいまた
さたまらさりしとき葦原中國
のことの葉として稲田姫素我鳥（鵝カ）
のさとよりそつたはれりけるし
かありしよりこのかたそのみち
さかりにをこりそのなかれいまに
たゆることなくしていろにふけ
りこゝろをのふるなかたてとし
よをゝさめたみをやはらくるみち
とせりかゝりけれは代々の御かと
もこれをすてたまはすえらひを
かれたる集とも家々のもてあそひ
物としてこと葉の花のこれる木下
もかたくおもひの露もれたる草
かくれもあるへからすしかはあれと
伊勢の海きよきなきさのたまはひ
ろふともつくることなくいつみのそ／ま　」〈6ウ〉

し けきみやきはひくともたゆへ
からすものみなかくのことし哥の
みちまたをなしかるへしこれによ
りて右衛門督源朝臣通具大蔵卿藤
原朝臣有家左近中将藤原朝臣定家
前上総介藤原朝臣家隆右近少将
藤原雅経等におほせてむかしいま
ときをわかすたかきいやしき人
をきらはすめに見えぬ神仏のことの
はもうはたまの夢につたえたる
ことまてひろくもとめあまねく
あつめしむをの／＼えらひたてま
つれるところなつひきのいとのひと
すちならすゆふへの雲の思さため
かたきゆえにみとりのほらはなかう
はしきあしたたまのみきりかせす、
しきゆふへなにはつのなかれをく
みてすみにこれるをさためあさか
」〈7ウ〉

あまつひつきのくらゐにそなは
りいまはやすみしるなをのこれ（か）
てはこやの山にすみかをしめたり
といへともすへらきはをこたるみちを
まほりほしのくらひはまつりことを
たすけしちきりをわすれすして
あめのしたしけきことわさ雲の
うゑのいにしへにもかはらさりけ
れはよろつのたみかすかの丶草
のなひかぬかたなくよものうみあ
きつしまの月しつかにすみて
わかの浦のあとをたつねしきしま
のみちをもてあそひつ丶この集をえ
らひてなかきよにつたへむとなり
かの万葉集は哥のみなもとなり時
うつりことへた丶りていまの人
しる事かたし延喜のひしりの御
よには四人に勅して古今集をえらは
」〈8オ〉

しめ天暦のかしこきみかとは五人に
おほせて後撰集をあつめしめ給へ
りその丶ち拾遺後拾遺金葉詞華
千載等の集はみな一人これをうけた
まはれるゆえにき丶もらし見をよは
（さカ）けるところもおほかるへしよりて
古今後撰のあとをあらためす五人の
ともからをさためてしるしたて
まつらしむるなりそのうへみつから
さためてつからみかけることはとをく
もろこしのふみの道をたつぬれははま
ちとりあとありといへともわかくに
山とことの葉はしまりてのちくれ
たけのよ丶にか丶るためしなむなかり
けるこのうちみつからの哥をのせた
ることふるきたくひはあれと十首に
はすきさるへしかるをいまかれ
これえらへるところ三十首にあまれり
」〈8ウ〉

」〈9オ〉

」〈9ウ〉

これみる人のめたつへきいろもなく
心とゝむへきふしもありかたきゆ
えにかへりていつれとわけかたけれ
はもりのくち葉かすつもりみきわ
のもくつかすてすなりぬることは
みちにふける思ふかくしてのちの
あさけりをかへりみたるへしときに
元久二年三月廿六日なむしるし
おはりぬるめをいやしみゝをたうと
ふるあまりいその神ふるきあと
をはつといゑともなかれをくみて
みなもとをたつぬるゆへにとみの
をかはのたえせぬ道をゝこし
つれはつゆしもはあらたまるとも
松吹風のちりうせすはる秋は
めくるともそらゆく月の雲り
なくしてこのときにあえらむ物は
これをよろこひこのみちをあふかむ
」〈10オ〉

」〈10ウ〉

ものはいまをしのはさらめかも

」〈11オ〉

〈白　紙〉

新古今和謌集巻第一

春上

はるたつ心をよみ侍ける

攝政大上大臣

みよし野は山もかすみて白雪の

」〈11ウ〉

ふりにしさとにはるはきにけり（1）
はるのはしめの哥
太上天皇
ほの〳〵とはるこそそらにきにけら
しあまのかくやまかすみたなひく（2）
百首哥たてまつりし時春哥
式子内親王
やまふかみはるともしらぬ松のとに
たえ〳〵かゝるゆきのたまみつ（3）
五十首哥たてまつりし時
宮内卿
かきくらしなをふるさとの雪の中に
あとこそみえねはるはきにけり（4）」〈12ウ〉
入道前関白太政大臣右大臣に侍
ける時百首哥よませ侍けるに
たつはるのこゝろを
皇太后宮大夫俊成
けふといへはもろこしまてもゆくはるを
みやこにのみとおもひけるかな（5）
題不知
俊恵法師
はるといへはかすみにけりな昨日まて
なみまにみえしあはちしまやま（6）」〈13オ〉
西行法師
いはまとちしこほりもけさはとけそめ
てこけのしたみつみちもとむらん（7）
読人不知
かせませにゆきはふりつゝしかす
かにかすみたなひき春はきにけり（8）
ときはいまは春になりぬとみ
ゆきふるとをき山へに霞たなひ／く（9）」〈13ウ〉
堀河院御時百首哥たてまつりけ
るに殘雪のこゝろをよみ侍ける
権中納言國信
かすか野ゝしたもえわたる草のうへに
つれなくみゆるはるのあはゆき（10）

題不知

山邊赤人

あすからはわかなつまむとしめし
のにきのふもけふもゆきはふりつゝ（11）」〈14オ〉

天暦御時屏風哥

壬生忠見

かすかのゝ草はみとりになりに
けりわかなつまむとたれかしめけむ（12）

崇徳院に百首哥たてまつり
ける時はるの哥

前参議教長

わかなつむ袖とそみゆるかすかのゝ
とふひのゝへのゆきのむらきえ（13）　」〈14ウ〉

延喜御時屏風に

紀貫之

ゆきてみぬ人もしのへとはるの
のゝかたみにつめるわかなゝりけ／り（14）

述懐百首哥読侍けるにわかな

皇太后宮大夫俊成

さわにをうるわかなゝらねといたつらに
としをつむにそ袖はぬれけり（15）

日吉社に読てたてまつり
ける子日の哥

」〈15オ〉

さゝなみやしかのはまゝつふりに
けりたかよにひけるねのひなるらん（16）

〜〜百首哥たてまつりし時

藤原家隆朝臣

たにかはのうちいつるなみもこゑた
てつうくひすさそえはるの山風（17）

和哥所にて関路鶯といふことを

太上天皇

」〈15ウ〉

うくひすのなけともいまたふるゆ
きにすきのはしろきあふさかの山（18）

堀川院に百首哥たてまつりけ
る時殘雪の心をよみ侍ける

藤原仲實朝臣

はるきては花ともみよとかたをか
のまつのうはゝにあわゆきそふる（19）

題不知　　中納言家持　　」〈16オ〉

読人不知

まきもくのひはらの（も）いまたくも
らねはこまつかえたにあわゆきそふる（20）

読人不知

いまさらにゆきふらめかもかけ
ろふのもゆるはるひとなりにし／物を（21）

凡河内躬恒

いつれをか花とはわかむふるさとのかす
かのはらにまたきえぬゆき（22）　」〈16ウ〉

家百首哥合に餘寒の心を

攝政大政大臣

そらは猶かすみもやらすかせさえて
ゆきけにくもるはるの夜の月（23）

和哥所にて春山月といふ心を

読める　　越前

山ふかみなをかけさむしはるの
月そらかきくもりゆきはふりつゝ（24）

詩をつくらせて哥に合侍し　　」〈17オ〉
に水郷春望といふことを

左衛門督通光

みしまえやしもゝまたひぬあし
のはにつのくむほとのはるかせそ吹（25）

藤原秀能

ゆふつくよしほみちくらしなに
はえのあしのわかはにこゆるしらなみ（26）

はるの哥とて　　西行法師　　」〈17ウ〉

・源重之

ふりつみしたかねのみゆきとけにけ
りきよたきかはのみつのしらなみ（27）

・むめかゑにものうきほとにちるゆき
をはなともいはしはるのなたてに（28）

山邊赤人

あつさゆみはる山ちかくいゑゐしてた
えすきゝつるうくひすのこゑ（29）

読人不知（＊小書一行）

梅かえになきてうつろふうくひすのはねしろたえに
あはゆきそふる（＊小書一行）（30）　」〈18オ〉

百首哥たてまつりし時　惟明親王（＊小書一行）

うくひすのなみたのつらゝうちとけ
てふるすなからやはるをしるらん（31）

題不知

志貴王子

いはそゝくたるひのうへのさわらひ
のもえいつるはるになりにけるかな（32）

百首哥たてまつりし時

前大僧正慈圓

あまのはらふしのけむりの春の
鳥（色カ）のかすみになひくあけほのゝそら（33）」〈18ウ〉

崇徳院百首哥たてまつりける時

藤原清輔朝臣

あさかすみふかくみゆるやけむり
たつむろのやしまのわたりなるら／ん（34）

夕霞といふことをよめる

後徳大寺左大臣

なこのうみのかすみのまよりなかむれは
いりひおあらふをきつしらなみ（35）　」〈19オ〉

男共しをつくりて哥に合侍

しに水郷春望といふことを

太上天皇

みわたせは山もとかすむみなせかはゆ
ふへはあきとなに思けん（36）

攝政太政大臣家百首哥合に

春暁といふ心をよみ侍ける

藤原家隆朝臣

かすみたつすゑの松山ほの／〳〵となみ
なみにはなるゝよこくものそら（37）　」〈19ウ〉

守覚法親王五十首哥読ませ

侍けるに

藤原定家朝臣

はるの夜のゆめのうきはしとたえして
みねにわかるゝよこくものそら（38）

きさらきまてむめの花さき

侍らさりけるとしよみ侍ける

中務

しるらめやかすみのそらをなかめつゝ
はなとにほはぬはるをなけくと（39）

守覚法親王家五十首哥に

藤原定家朝臣

おほそらはむめのにほひにかすみつゝ
くもりもはてぬはるのよの月（40）

題不知

宇治前関白太政大臣

をられけりくれなひにほふむめの
花けさしろたえにゆきはふれゝと（41）

かきねの梅をよみ侍ける

」〈20オ〉

」〈20ウ〉

藤原敦家朝臣

あるしをはたれともわかすはるはたゝ
かきねのむめをたつねてそとふ（42）

梅花遠薫といへる心を読侍ける

源俊頼朝臣

心あらはとはましものをむめかゑにた
かさとよりかにほひきつらむ（43）

百首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

むめのはなにほひをうつすそて
のうへにのきもる月のかけそあらそふ（44）

藤原家隆朝臣

むめかゝにむかしをとへははるの月
こたえぬかけそ袖にうつれる（45）

千五百番哥合に

右衛門督通具

むめのはなたか袖ふれしにほひ
そと春やむかしの月にとはゝや（46）

」〈21オ〉

」〈21ウ〉

皇太后宮大夫俊成女

梅花あかぬ色かもむかしにて
をなしかた身のはるの夜の月（47）

梅花にそへて大貳三位につか
はしける

権中納言定頼

見ぬ人によそへてみつるむめの花
ちりなむのちのなくさめそなき（48）」〈22オ〉

かへし

大貳三位

はることに心をしむる花のえに
たかなをさりのそてかふれつる（49）

二月雪落衣といふことを読
侍ける

康資王母

むめちらすかせもやこえて吹つらむ
かほれるゆきのそてにみたるゝ（50）」〈22ウ〉

題不知

西行法師

とめこかし梅さかりなる我やとを
うときも人のおりにこそよれ（51）

百首哥たてまつりし時春哥

式子内親王

なかめつるけふはむかしになりぬ
とものきはのむめは我をわするな（52）」〈23オ〉

土御門内大臣家に梅香留袖と
云ことを読はへりけるに

藤原有家朝臣

ちりぬれはにほひはかりをむめの花
ありとやそてにはるかせそ吹（53）

題不知

八条院高倉

ひとりのみなかめてちりぬ梅花
しるはかりなる人はとひこす（54）」〈23ウ〉

文集嘉陵春夜詩不明不暗朧
々月といへることをよみ侍ける

大江千里

てりもせすくもりもはてぬはるの
夜のおほろ月よにしく物そなき（55）

祐子内親王ふちつほにすみ侍け
るに女房うへ人なとさるへきか
きり物かたりして春秋の
あはれいつれにか心ひくなとあら
そひ侍けるに人〳〵おほく秋に
心をよせ侍けれは」〈24オ〉

菅原孝標女

あさみとりはなもひとつにかすみつゝ
おほろにみゆる春の夜の月（56）

百首哥たてまつりし時

源具親

なにはかたかすまぬなみも霞けり
うつるもくもるおほろ月夜に（57）」〈24ウ〉

攝政太政大臣家哥合に

寂蓮法師

いまはとてたのむのかりもうちわひぬ
おほろ月夜にのあけほのゝそら（58）

刑部卿頼輔哥合はへりけるに

よみてつかはしける

皇太后宮大夫俊成

きく人そなみたはおつるかへるかり
なきてゆくなるあけほのゝそら（59）」〈25オ〉

題不知

読人不知

ふるさとにかへるかりかねさよふけて
くもちにまよふこゑきこゆなり（60）

帰鴈を

攝政太政大臣

わするなよたのむのさはをたつかり
もいなはのかせの秋の夕くれ（61）

百首哥たてまつりし時

かへるかりいまはの心有明に
月とはなとのなこそをしけれ（62）」〈25ウ〉

守覚法親王の五十首哥に

藤原定家朝臣

しもまよふそらにし（も）ほれし
かりかねの返つはさに春さめそふる（63）

閑中春雨といふことを

大僧正行慶

つく〳〵とはるのなかめのさひしきは
しのふにつたふのきのたまみつ（64）」〈26オ〉

寛平御時后宮の哥合に

伊勢

みつのおもにあやをりみたる春雨や
やまをみとりをなへてそむらむ（65）

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

ときはなるやまのいはねにむすこ
けのそめぬみとりにはるさめそふる（66）」〈26ウ〉

清輔朝臣もとにて雨中苗代と
いふ心を

勝命法師

あめふれはおたのますらをいとま
あれやなはしろ水をそらにまかせて（67）

延喜御時屏風に

凡河内躬恒

はるさめのふりそめしよりあをや
きのいとのみとりそいろまさりける（68）」〈27オ〉

題不知

太宰大貳高遠

うちなひきはるはきにけりあをや
きのかけふむみちにひとのやすらふ（69）

輔仁親王

みよし野ゝおほかはのへのふるやなき
かけこそみえねはるめきにけり（70）

百首哥中に

崇徳院御哥

嵐吹きしのやなきのいなむしろ
おりしくなみにまかせてそみる（71）」〈27ウ〉

建仁元年三月哥合に霞隔遠
樹といふことを
権中納言公経
たかせさすむつたのよとの柳はら
みとりもふかくかすむはる哉（72）
百首哥読侍ける時春哥とて読る
殷冨門院大輔
はるかせのかすみ吹とくたえまより
みたれてなひくあをやきのいと（73）
千五百番哥合に春歌
藤原雅経
しら雲のたえまになひくあをやきの
かつらき山にはる風そ吹（74）
藤原有家朝臣
あをやきのいとにたまぬく白露の
しらすいくよのはるかへぬらむ（75）　」〈28ウ〉
宮内卿
うすくこきのへのみとりのわかくさに
あとまてみゆる雪のむらきえ（76）
題不知
曽祢好忠
あらをたのこそのふるあとのふるよもき
いまははるへとひこはえにけり（77）
壬生忠見
やかすとも草はもえなむかすか野を
たゝはるのひにまかせたらなむ（78）　」〈29オ〉
西行法師
よしのやまさくらか枝に雪ちりて
花をそけなるとしにもあるかな（79）
白河院とはにをはしましける時
人〳〵山家侍花といへる心を読侍けるに
藤原隆時朝臣
さくらはなさかはまつみんとおもふまに
ひかすへにけるはるのやまさと（80）　」〈29ウ〉
亭子院哥合に
紀貫之

我こゝろはるの山へにあくかれて
なか〳〵しひをけふもくらしつ（81）

攝政太政大臣家百首哥合野遊
心をよみ侍ける
藤原家隆朝臣

おもふとちそこともしらすゆきくれぬ
はなのやとかせのへのうくひす（82）　」〈30オ〉

百首哥たてまつりし時（＊小書一行）
式子内親王

いまさくらさきぬとみえてうす雲
るはなにかすめるよのけしき哉（83）

題不知
読人不知

ふして思おきてなかむるはる雨に
花のしたひもいかにとくらむ（84）

中納言家持

ゆかむ人こむひとしのへ春かすみ
たつたのやまのはつさくら花（85）　」〈30ウ〉

花哥とてよみ侍ける
西行法師

よしのやまこそのしほりの道かゑて
またみぬかたのはなをたつねむ・（86）

・和哥所歌合に羈旅花といふことを
藤原雅経

いはねふみかさなるやまをわけすてゝ
はなもいくえのあとのしらくも（93）　」〈31オ〉

五十首哥たてまつりし時

たつねきて花にくらせる木のま
よりまつとしもなき山のはの月（94）

故郷花といへるこゝろを
前大僧正慈圓

ちりちらす人もたつねぬふるさとの
つゆけき花にはる風そ吹（95）

千五百番哥合に
右衛門督通具

いその神ふるのゝさくらたれうゑて　」〈31ウ〉

はるはわすれぬかたみなるらむ（96）
正三位季能
はなをみるみちのしは草ふみわけて
よし野丶やまの春のあけほの（97）
藤原有家朝臣
あさひかけにほへる山のさくらはな
つれなくきえぬ雪かとそみる（98）　」〈32オ〉

〈白　紙〉

」〈32ウ〉

新古今和歌集巻第二
春哥下
釋阿和哥所にて九十賀し侍し
おり屏風に山に桜さきたる所
太上天皇
さくらさくとをやまとりのしたり
をのなか／＼しひもあかぬ色かな（99）
千五百番哥合に春哥
皇太后宮大夫俊成
いくとせのはるに心をつくしきぬ
あはれとおもへみよしの丶はな（100）
百首哥に
式子内親王
はかなくてすきにしかたをかそふ
れは花に物おもふはるそへにける（101）
内大臣に侍ける時望山花といへ
る心を読はへりける
京極前関白太政大臣
白雲のたなひく山のやまさくら
いつれをはなとわきておらまし（102）
祐子内親王家にて人／＼花の哥
よみ侍けるに
権大納言長家

」〈33オ〉

」〈33ウ〉

花のいろにあまきるかすみたちまよひ
そらさへにほふ山さくらかな（103）

題不知　赤人　」〈34オ〉

も丶しきのおほみや人はいとまあ
れやさくらかさしてけふもくらしつ（104）

在原業平朝臣

はなにあかぬなけきはいつもせしかと／も
けふのこよひに丶るときはなし（105）

凡河内躬恒

いもやすくねられさりけり春の夜は
花のちるのみゆめにみえつ丶（106）

伊勢　」〈34ウ〉

山さくらちりてみゆきにまかひなは
いつれかはなとはるにとはなむ（107）

貫之

我やとのものなりなからさくらはな
ちるをはえこそと丶めさりけれ（108）

寛平御時后宮の哥合に

読人不知

かすみたつはるの山へにさくらはな
あかすちるとやうくひすのなく（109）　」〈35オ〉

題不知　赤人

はるさめはいたくなふりそさくら花
またみぬ人にちらまくもをし（110）

中納言家持

ふるさとに花はちりつ丶みよしの丶
山のやな木（さくら）はまたさかりなり〔1979〕

紀貫之

はなのかにころもはふかくなりにける
このしたかけのかせのまに〳〵（111）　」〈35ウ〉

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成女

かせかよふねさめのそての花のかに
かほるまくらのはるの夜のゆめ（112）

守覚法親王五十首哥読ませ
侍けるとき
藤原家隆朝臣
このほとはしるもしらぬもたまほこの　」〈36オ〉
ゆきかふそては花のかそする（113）
攝政太政大臣家に五十首哥読侍けるに
皇太后宮大夫俊成
またやみんかたのゝみのゝさくらかり
花のゆきちる春のあけほの（114）
花の哥とてよみ侍ける
祝部成仲
ちりちらすおほつかなきは春かすみ
たなひく山のさくらなりけり（115）　」〈36ウ〉
山さとにまかりて読侍ける
能因法師
やまさとのはるのゆふくれきてみれは
いりあひのかねに花そちりける（116）
題不知
恵慶法師
さくらちる春の山へはうかりけり
よをのかれにとこしかひもなく（117）
はなみ侍ける人にさそはれてよみ　」〈37オ〉
はへりける
康資王母
山さくらはなのした風ふきにけり
このもとことのゆきのむらきえ（118）
題不知
源重之
はるさめのそをふるそらのをやみ
せすおつるなみたに花そちりける（119）
かりかねのかへるはかせやさそふ　」〈37ウ〉
らむすきゆくみねの花ものこらぬ（120）
百首哥めしゝ時春の歌
源具親
ときしもあれたのむのかりのわかれ
さへ花ちるころのみよしのゝさと（121）

見山花といへるこゝろを
大納言経信
山ふかみすきのむらたちみえぬまて
をのへのかせにはなのちる哉（122）
堀河院御時百首哥たてまつり
けるに花哥
大納言師頼
このしたのこけのみとりもみえぬまて
やえちりしける山さくらかな（123）
花十首哥読侍けるに
左京大夫顕輔
ふもとまてをのへのさくらちりこすは
たなひく春とみてそすきまし（124）
花落客稀といふことを
刑部卿範兼
はなちれはとふ人まれになりはて、
いとひし風のをとのみそする（125）
題不知
西行法師
なかむとて花にもいたくなれぬれは
ちるわかれこそかなしかりけれ（126）
越前
山里のにはよりほかの道もかな
はなちりぬやと人もこそとへ（127）
五十首哥たてまつりし中に
湖上花を
宮内卿
はなさそふひらのやま風吹にけり
こきゆくふねのあとみゆるまて（128）
関路花を
あふさかやこすゑのはなを吹からに
あらしそかすむせきのすきむら（129）
百首哥たてまつりしに春哥
二条院讃岐
山たかみゝねのあらしにちる花
の月にあまきるあけかたのそら（130）

」〈38オ〉
」〈38ウ〉
」〈39オ〉
」〈39ウ〉

百首哥めしける時はるの哥
崇徳院御哥
やまたかみいはねのさくらちるときは
あまのはころもなつるとそみる（131）　」〈40オ〉
春日社哥合とて人〳〵読侍けるに
刑部卿頼輔
ちりまかふはなのよそめはよしの
山あらしにさはくみねのしら雲（132）
最勝四天王院の障子によし
のやまかきた所（る）
太上天皇
みよしのゝたかねのさくらちり
にけりあらしもしろき春のあけほの（133）」〈40ウ〉
千五百番哥合に
藤原定家朝臣
さくらいろのにはのはるかせあともな
しとはゝそ人のゆきとたにみむ（134）
ひとゝせしのひて大内の花み
にまかりて侍しにはにち
りて侍し花をすゝりのふたに
いれて攝政の許につかはしける
太上天皇　」〈41オ〉
けふたにもにはをさかりとうつる花き
えすはありともはなゆきかともみよ（135）
返し
攝政太政大臣
さそはれぬ人のためとやのこり
けむあすよりさきの花のしらゆき（136）
家のやへさくらをゝらせて
惟明親王の許につかはしける
式子内親王　」〈41ウ〉
やえにほふのきはのさくらうつろひぬ
かせよりさきにとふ人もかな（137）
かへし
惟明親王
つらき哉うつろふまてにやえさくら

とへともいはてすくるこゝろは（138）

五十首哥たてまつりし時

藤原家隆朝臣

さくらはなゆめかうつつかしら雲の
たえてつねなきみねの春風（139）

題不知

皇太后宮大夫俊成女

うらみすやうきよを花のいとひつゝ
さそふかせあらはとおもひけるをは（140）

後大徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはしさくら
花さきてはちりぬあはれよのなか（141）

入道前関白太政大臣家に百首哥よみ侍(て)けるとき」〈42ウ〉

俊恵法師

なかむへきのこりの春をかそふれは
花とゝもにもちる涙かな（142）

花哥とて読る

殷富門院大輔

花にもまたわかれむはるは思いてよ
さきちるたひの心つくしを（143）

千五百番哥合に」〈43オ〉

左近中将良平

ちるはなのわすれかたみのみねの雲
そをたにのこせはるの山風（144）

落花といふことを

藤原雅経

花さそふなこりを雲に吹とめて
しはしはにほへはるのやまかせ（145）

題不知

後白川院御哥」〈43ウ〉

をしめともちりはてぬれはさくら花
いまはこすゑをなかむはかりそ（146）

残春のこゝろを

攝政太政大臣

よし野山花のふるさとあとたえて

むなしき枝にはる風そふく（147）

題不知

大納言経信

ふるさとのはなのさかりはすきぬれと
おもかけさらぬはるのそらかな（148）

百首哥中に

式子内親王

花はちりそのいろとなくなかむれは
むなしきそらにはるさめそふる（149）

小野宮のおほいまうち君法輪寺に
花見はへりけるかよめる

清原元輔

たかためかあすはのこさむ山さくら
こほれてにほへけふのかたみに（150）

曲水宴をよめる

中納言家持

から人のふねをうかへてあそふてふ
けふそわかせこはなかつらせよ（151）

」〈44オ〉

」〈44ウ〉

紀貫之曲水宴し侍ける時月入
花瀬暗といふことを読侍ける

坂上是則

花なかすせをもみるへきみか月の
われていりぬる山のおちかた（152）

雲林院のさくらみにまかりける
にみなちりはてゝわつかにかた
枝のこりて侍けれは

良暹法師

たつねつる花も我身もおとろえて
のちの春ともえこそちきらね（153）

千五百番哥合に

寂蓮法師

おもひたつとりはふるすもたのむ
らむなれぬるはなのあとのゆふくれ（154）

ちりにけりあはれうらみのたれな
れは花のあとゝふはるの山かせ（155）

権中納言公経

」〈45オ〉

」〈45ウ〉

はるふかくたつねいるさの山のはに
ほのみし雲の色そのこれる（156）

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

はつせやまうつろふ花に春くれ
てまかひし雲そみねにのこれる（157）

藤原家隆朝臣

よしのかはきしの山吹さきにけり
みねのさくらはちりはてぬらむ（158）

皇太后宮大夫俊成

こまとめてなを水かはむ山吹の
はなのつゆそふいてのたまかは（159）

堀川院御時百首哥たてまつりけるに」〈46ウ〉

権中納言國信

いはねこすきよたきかはのはやけれは
なみをりかくるきしのやまふき（160）

題しらす

厚見王

かはつなく神なひかはにかけみえて
いまやさくらむ山吹のはな（161）

延喜十三年亭子院哥合に

藤原興風

あしひきの山吹の花さきにけり
ゐてのかはつはいまやなくらん（162）

飛香舎にて藤花宴侍けるに

延喜御哥

かくてこそみまくほしけれよろつ世を
かけてにほへるふちなみの花（163）

天暦四年三月十四日藤壺に
わたらせたまひて花をし
ませ給けるに

天暦御製

まとひしてみれともあかぬふちな
みのたゝまくをしきけふにも有哉（164）

清慎公家屏風に

貫之

」〈47オ〉

」〈47ウ〉

くれぬとは思ふものからふちのはな
さけるやとにははるそさひしき（165）
　ふちのまへにか丶れるを読る
みとりなる松にか丶れるふちなれと
をのかころとそはなはさきける（166）
　はるのくれつかた實方朝臣
　のもとにつかはしける
　道信朝臣
ちりのこる花もやあるとうちむれ
てみやまかくれをたつねてしかな（167）
　修行し侍けるころはるの
　くれによみける
　大僧正行尊
このもとのすみかもいまはあれぬへし
はるしくれなはたれかとひこん（168）
　五十首哥たてまつりし時
　寂蓮法師
くれてゆく春のみなとはしらねと／も
かすみにをつるうちのしはふね（169）
　山家三月盡をよみ侍ける
　藤原伊綱
こぬまても花ゆえ人のまたれつる
はるもくれぬるみやまへのさと（170）
　題不知
　皇太后宮大夫俊成女
いその神ふるのわさたをうちかへし
うらみかねたるはるのくれかな（171）
　寛平御時后宮哥合の（に）哥
　よみ人しらす
まてといふにとまらぬ物としりな
からしゐてそをしき春のわかれは（172）
　山家暮春といへるこ丶ろを
　宮内卿
しはのとをさすやひかけのなこ
りなく春くれか丶る山のはの雲（173）
　百首哥たてまつりし時

」〈48オ〉
」〈48ウ〉
」〈49オ〉
」〈49ウ〉

攝政太政大臣

あすよりはしかのはなそのまれ
にたにたれかはとはむ春のふるさと（174）」〈50オ〉

〈白　紙〉

」〈50ウ〉

新古今和歌集巻第三

夏歌

題不知

持統天皇御哥

はるすきて夏きにけらししろ
たえのころもほすてふあまのかくやま（175）

素性法師

をしめともとまらぬ春もある物を
いはぬにきたる夏ころもかな（176）

」〈51オ〉

ころもかへをよみ侍ける

前大僧正慈圓

ちりはてゝ花のかけなきこのもとに
たつことやすき夏ころもかな（177）

はるをゝくりて昨日のことし
といふことを

源道済

夏ころもきていくかにかなりぬらむ
のこれる花はけふもちりつゝ（178）

」〈51ウ〉

夏のはしめの哥とてよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成女

おりふしもうつれはかへつ世中の
人のこゝろのはなそめのそて（179）

卯花如月といへる心をよませ給ける

白川院御哥

うの花のむら〳〵さけるかきねをは
雲まの月のかけかとそみる（180）

題不知

」〈52オ〉

太宰大貳重家

卯花のさきぬるときはしろたえの
なみもてゆへるかきねとそみる（181）

斎院に侍ける時神立にて

式子内親王

わすれめやあふひをくさにひき
むすひかりねのゝへのつゆのあけほの（182）

あふひをよめる

小侍従

いかなれはその神山のあふひくさ
としはふれともふたはなるらむ（183）

最勝四天王院の障子にあさかの
ぬまかきたる所

藤原雅経朝臣

野へはいまたあさかのぬまにかるくさの
かつみるまゝにしけるころかな（184）

崇徳院に百首哥たてまつり
けるとき夏哥

」〈53オ〉

待賢門院安藝

さくらあさのをふの下草しけれ
たゝあかてわかれし花の名なれは（185）

題不知

曽祢好忠

花ちりしにはの木葉もしけりあひ
てあまてる月のかけそまれなる（186）
かりにてとうらみし人のたえにし
をくさ葉につけてしのふころかな（187）

」〈53ウ〉

藤原元真

なつくさはしけりにけりなたまほ
この道ゆき人もむすふはかりに（188）

延喜御哥

夏草はしけりにけれとほとゝきす
なとわかやとにひとこゑもせぬ（189）

柿下人麿

なくこゑをえやはしのはぬほとゝきす
はつ卯花のかけにかくれて（190）

」〈54オ〉

賀茂にまうて、侍けるに人の
郭公なかなむと申けるあけ
ほのかたをかのこすゑをかし
うみえ侍けれは

紫式部

ほと、きすこゑまつ程はかたをかの
もりのしつくにたちやぬれまし（191）
かもにこもりたりけるあかつき
ほと、きすのなきけれは

」〈54ウ〉

弁乳母

ほと、きすみやまいつなるはつこゑを
いつれのやとのたれかきくらむ（192）

題不知

読人不知

五月やまうのはなつき夜ほと、きす
きけともあかすまたなかむかも（193）
おのかつまこひつ、なくや五月やみ
神なみ山のやまほと、きす（194）

」〈55オ〉

中納言家持

ほと、きすひとこゑなきていぬる
夜はいかてか人のいをやすくぬる（195）

大中臣能宣朝臣

郭公なきつ、いつるあしひきの
やまとなてしこさきにけらしも（196）

大納言経信

ふたこゑとなきつときかは郭公
ころもかたしきうた、ねはせむ（197）

」〈55ウ〉

待客聞郭公といへるこ、ろを

白川院御哥

ほと、きすまたうちとけぬしのひね
はこぬひとをまつ我のみそきく（198）

題不知

花園左大臣

き、てしもなをそねられぬ郭公
まちしよころの心ならひに（199）

神立にて郭公をき、て

」〈56オ〉

前中納言匡房

卯花のかきねならねとほとゝき
すつきのかつらのかけになくなり（200）

入道前関白右大臣にはへりける
時百首哥よませ侍ける郭公哥

皇太后宮大夫俊成

むかし思ふくさのいほりの夜の雨に
なみたなそいそ山ほとゝきす（201）

あめそゝく花たちはなに風す
きて山ほとゝきす雲になくなり（202）

題不知　相模

きかてたゝねなまし物を郭公
なか〳〵なりや夜はのひとこゑ（203）

紫式部

たかさともとひもやくるとほとゝき
すこゝろのかきりまちそわひにし（204）

寛治八年前太政大臣高陽
院哥合に郭公を

」〈57オ〉

周防内侍

よをかさねまちかね山のほとゝきす
雲井のよそにひとこゑそき／く（205）

海邊郭公といふことを読侍ける

按察使公通

ふたこゑときかすはいてしほとゝきす
いく夜あかしのとまりなりとも（206）

百首哥たてまつりし時

夏哥中に　民部卿範光

ほとゝきすなをひとこゑは思いてよ
おいそのもりのよはのむかしを（207）

郭公をよめる

八条院高倉

ひとこゑはおもひそあえぬほとゝきす
たそかれときのくものまよひに（208）

千五百番哥合に

攝政太政大臣

ありあけのつれなくみえし月は

」〈58オ〉

いてぬ山ほとゝきすまつよなからに（209）

後徳大寺左大臣家に十首哥

読侍けるをよみてつかはしける

皇太后宮大夫俊成

我こゝろいかにせよとてほとゝきす

くもまの月のかけになくらむ（210）

郭公のこゝろをよみ侍ける

前太政大臣

ほとゝきすなきているさの山のはゝ

月ゆへよりもうらめしきかな（211）

権中納言親宗

ありあけの月はまたぬにいてぬれと

なをやまふかきほとゝきすかな（212）

林間郭公といふことを

藤原保季朝臣

すきにけりしのたのもりの郭公

たえぬしつくを袖にのこして（213）

題しらす

藤原家隆朝臣

いかにせむこぬ夜あまたのほとゝきす

またしとおもへはむらさめのそら（214）

百首哥たてまつりしに

式子内親王

こゑはして雲ちにむせふほとゝきす

なみたやそゝくよひのむらさめ（215）

千五百番哥合に

権中納言公経

ほとゝきすなをうとまれぬ心かな

なかなくさとのよそのゆふくれ（216）

題不知

西行法師

きかすともこゝをせにせむほとゝき

す山たのはらのすきのむらたち（217）

ほとゝきすふかきみねよりいてにけり

とやまのすそにこゑのおちくる（218）

山家暁郭公といへるこゝろを

後徳大寺左大臣

をさゝ吹しつのまろやのかりのと
をあけかたになくほとゝきすかな（219）
五十首哥人〳〵によませ侍ける
時夏哥とてよみ侍ける
攝政太政大臣
うちしめりあやめそかほる郭公
なくやさ月のあめのゆふくれ（220）
述懐によせて百首哥読侍ける時
皇太后宮大夫俊成
けふはまたあやめのねさへかけそへ
てみたれそまさる袖のしらたま（221）
五月五日くすたまつかはして
侍けるに人
大納言経信
あかなくにちりにし花のいろ〳〵は
のこりにけりな君かたもとに（222）
つほねならひにすみ侍ける
ころ五月五日六もろともになかめ／あ」〈61オ〉

（あ）かしてあしたになかきねをつゝ
みて紫式部につかはしける
上東門院小少将
なへて世のうきになかるゝあやめ
くさけふまてかゝるねはいかゝみる（223）
かへし
紫式部
なにことゝあやめはわかてけふも
なをたもとにあまるねこそたえせね（224）」〈61ウ〉
山畦早苗といへるこゝろを
大納言経信
さなへとるやまたのかけひもりにけり
ひくしめなはにつゆそこほるゝ（225）
釋阿に九十賀たまはせ侍し
とき屏風に五月雨
攝政太政大臣
をやまたにひくしめなはのうち
はへてくちやしぬらむさみたれのころ（226）」〈62オ〉

前中納言匡房

まこもかるよとのさはみつふかけれと
そこまて月のかけはすみけり（229）

雨中木繁といふこゝろを

藤原基俊

たまかしはしけりにけりな五月雨
にはもりの神のしめはふるまて（230）

百首哥よませ侍けるに

入道前関白大政大臣

さみたれはをふのかはらのまこも草
からてや浪のしたにくちなむ（231）

五月雨のこゝろを

藤原定家朝臣

たまほこのみちゆき人のことつて／も
たえてほとふるさみたれのそら（232）

荒木田氏良

さみたれの雲のたえまをなかめつゝ
まとよりにしに月をまつかな（233）

百首哥たてまつりし時

前大納言忠良

あふちさくそとものこかけつゆを
ちてさみたれはるゝかせわたるなり（234）

五十首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

さみたれの月はつれなきみ山より
ひとりもいつるほとゝきすかな（235）

大神宮にたてまつりし夏

哥中に

太上天皇

ほとゝきす雲ゐのよそにすき
ぬなりはれぬおもひのさみたれのころ（236）

建仁元年三月哥合に雨後郭公

」〈62ウ〉

」〈63オ〉

」〈63ウ〉

」〈64オ〉

といへるこゝろを

二條院讃岐

さみたれの雲まの月のはれ行
をしはしまちけるほとゝきすかな（237）

題不知

皇太后宮大夫俊成

たれかまた花たちはなに思いてむ
我もむかしの人となりなは（238）

右衛門督通具

ゆくすゑをたれしのへとて夕風に
ちきりかをかむやとのたちはな（239）

百首哥たてまつりし時夏哥

式子内親王

かへりこぬむかしをいまに思ねの
ゆめの枕にゝほふたちはな（240）

」〈65オ〉

前大納言忠良

たちはなの花ちるのきのしのふ草
むかしおかけてつゆそこほるゝ（241）

五十首哥たてまつりし時

前大僧正慈圓

さ月やみゝしかきよはのうたゝねに
はなたち花の袖にすゝしき（242）

題不知

読人不知

たつぬへき人はのきはのふるさとに
はなかとかほるにはのたちはな（243）
ほとゝきすはなたち花のかをとめて
なくはむかしの人や恋しき（244）

皇太后宮大夫俊成女

たちはなのにほふあたりのうたゝねは
ゆめもむかしのそてのかそする（245）

藤原家隆朝臣

ことしより花さきそむるたちはなの
いかてむかしのかにゝほふらむ（246）

」〈66オ〉

守覚法親王五十首哥よませ

侍けるとき

藤原定家朝臣

夕くれはいつれの空のなこりとて
はなたち花に風の吹らむ（247）

堀川院御時后宮にて閏五月郭公
といふ心を男ともつかうまつりけるに

権中納言國信

ほとゝきすさ月みな月わきかねて　」〈66ウ〉
やすらふこゑそそらにきこゆる（248）

題不知

白川院御哥

にはのをもは月もらぬまてなりにけり
こすゑに夏のかけしけりつゝ（249）

恵慶法師

我やとのそともにたてるならのはの
しけみにすゝむ夏はきにけり（250）

攝政太政大臣家百首哥合に鵜
川をよみ侍ける

前大僧正慈圓

うかひふねあはれとそみるものゝふの　」〈67オ〉
やそうちかはのゆふやみのそら（251）

寂蓮法師

うかひふねたかせさしこすほとなれ
やむすほゝれゆくかゝり火のかけ（252）

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成

大ゐかはかゝりさしゆくうかひふね
いくせに夏のよをあかすらん（253）

藤原定家朝臣

ひさかたのなかなるかはのうかゐふね　」〈67ウ〉
いかにちきりてやみをまつらむ（254）

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

いさり火のむかしのひかりほのみえて
あしやのさとにとふほたるかな（255）

式子内親王

まとちかきたけの葉すさむ風のをと

にいとゝみしかきうたゝねのゆめ（256）
　鳥羽にて竹風夜涼といへる事
　を人〳〵つかうまつりし時
　　東宮権太夫公継
ほとちかきいさゝむら竹かせ吹は
秋におとろく夏の夜のゆめ（257）
　五十首哥たてまつりし時
　　前大僧正慈圓
むすふてにかけみたれゆく山の井の
あかても月のかたふきにける（258）
　最勝四天王院の障子にきよみ
　かせきかきたる所
　　権大納言通光
きよみかた月はつれなきあまのとを
またてもしらむなみのうへかな（259）
　家百首哥合に
　　攝政太政大臣
かさねてもすゝしかりけり夏衣
」〈68オ〉

うすきたもとにやとる月かけ（260）
　攝政太政大臣家にて詩哥合け
　るに水邊冷自秋といふことを読ける
　　有家朝臣
すゝしさは秋やかへりてはつせかは
ふるかはのへのすきのしたかけ（261）
　題不知
　　西行法師
みちのへのした水なかるやなきかけ
しはしとてこそたちとまりつれ（262）
よられつるのもせのくさのかけろ
ひてすゝしくゝもるゆふたちのそ／ら（263）
　崇徳院に百首哥たてまつり
　ける時
　　藤原清輔朝臣
をのつからすゝしくもあるかな夏衣
ひもゆふくれのあめのなこりに（264）
　千五百番哥合に
」〈68ウ〉

」〈69オ〉

」〈69ウ〉

権中納言公経

つゆむすふにはのたまさゝうちなひ
きひとむらすきぬゆふたちの雲（265）

雲隔遠望といへる心を読侍ける

源俊頼朝臣

とをちにはゆふたちすらし久方
のあまのかくやま雲かくれゆく（266）

夏月をよめる

従三位頼政

にはのをもはまたかはかぬにゆふた
ちのそらさりけなくすめる月かな（267）

百首哥中に

式子内親王

ゆふたちの雲もとまらぬ夏のひ
のかたふく山に日くらしのこゑ（268）

千五百番哥合に

前大納言忠良

ゆふつくひさすやいりひのしはのとに
さひしくもあるかひくらしのこゑ（269）」〈70ウ〉

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

秋ちかきけしきのもりのなくせみの
なみたのつゆやしたはそむらむ（270）

二条院讃岐

なくせみのこゑもすゝしきゆふくれに
秋をかけたるもりのしらつゆ（271）

螢のとひわたるをみて読侍ける

壬生忠見

いつちとか夜はほたるのゝほるらむ
ゆくかたしらぬくさのまくらに（272）」〈71オ〉

五十首哥たてまつりし時

攝政大政大臣

ほたるとふのさはにしけるあしの
ねによな〳〵したにかよふ秋風（273）

刑部卿頼輔哥合し侍けるに

納涼をよめる

俊恵法師

ひさきをふるかたやまかけにしのひつゝ吹ける物を秋のゆふかせ（274）　」〈71ウ〉

瞿麦露滋といふことを

高倉院御哥

白露のたまもにゆへるませの中にひかりさへそふとこ夏の花（275）

ゆふかほ／＼よめる

前太政大臣

しらつゆのなさけをきけることのはやほの／＼みえし夕かほのはな（276）

百首哥よみ侍ける中に

式子内親王

たそかれのゝきはのをきにともすれはほにいてぬ秋そしたにことゝふ（277）　」〈72オ〉

夏哥とてよみ侍ける

前大僧正慈圓

雲まよふ夕へに秋をこめなからかせもほにいてぬおきのこゑかな（278）

大神宮にたてまつりし夏哥中に

大上天皇

山さとのみねのあま雲とたえしてゆふへすゝしきまきの下露（279）　」〈72ウ〉

文治六年女御入内屏風に

入道前関白太政大臣

いはゐくむあたりのをさゝたまほこえてかつ／＼むすふ秋のしらつゆ（280）

千五百番哥合に

宮内卿

かたえさすをふのうらなしはつ秋になるもならぬもかせもみにしむ（281）

百首哥たてまつりしとき

前大僧正慈圓

たひころもかたへすゝしくなりぬなりよやふけぬらむゆきあひのそら（282）　」〈73オ〉

延喜御時月次屏風に

壬生忠峯

夏はつるあふきと秋のしらつゆと
いつれかまつはをかむとすらむ（283）

貫之

みそきするかはのせみれはからころも
ひもゆふくれになみそたちける（284）

」〈73ウ〉

新古今和歌集巻第四

秋哥上

題不知

中納言家持

神なひのみむろの山のくすかつら
うら吹かへすあきはきにけり（285）

百首哥にはつ秋のこゝろを

崇徳院御哥

いつしかとおきのはむけのかたよりに
そゝやあきとそ風もふきける（286）

」〈74オ〉

藤原季通朝臣

このねぬる夜のまに秋はきにけら
しあさけのかせの昨日にもにす（287）

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

いつもきくふもとのさとゝ思へとも
きのふにかはるやまをろしのかせ（288）

百首哥よみ侍ける中に

藤原家朝臣

きのふたにとはむと思しつのくに
のいくたのもりに秋はきにけり（289）

」〈74ウ〉

最勝四天王院障子にたかさこ
かきたる所を

藤原秀能

ふく風のいろこそみえねたかさこの
をのえの松に秋はきにけり（290）

百首哥たてまつりし時

皇太后宮大夫俊成

ふしみやま秋のかけよりみわたせは

あくるたのもに秋かせそふく（291）　」〈75オ〉

守覚法親王五十首哥読侍(せ)ける時

藤原家隆朝臣

あけぬるかころもてさむしすかはらや
ふしみのさとの秋のはつ風（292）

千五百番哥合に

攝政太政大臣

ふかくさのつゆのよすかをちきり
にてさとをはかれす秋はきはにけり（293）

右衛門督通具

あはれまたいかにしのはん袖のつゆ　」〈75ウ〉
野はらのかせに秋はきにけり（294）

源具親

しきたえの枕のうへにすきぬな
りつゆをたつぬる秋のはつかせ（295）

顕照法師

みつくきのをかのくすはもいろつ
きてけさうらかなし秋のはつかせ（296）

越前

秋はたゝ心よりをくゆふつゆを
そてのほかとも思けるかな（297）　」〈76オ〉

五十首哥たてまつりし時秋哥

藤原雅経朝臣

きのふまてよそにしのひししたを
きのすゑ葉のつゆに秋風そふく（298）

題不知

西行法師

をしなへてものをゝもはぬ人に
さへこゝろをつくる秋のはつかせ（299）
あはれいかにくさはのつゆのこほるらむ
秋風たちぬみやきのゝはら（300）　」〈76ウ〉

崇徳院に百首哥たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

みしふつきうへし山たにひたはへ
てまた袖ぬらす秋はきにけり（301）

中納言中将に侍けるとき家に

山家早秋といへる心を読せ侍けるに

法性寺入道前関白太政大臣

あさきりやたつたの山のさとならて
秋きにけりとたれかしらまし（302）

題しらす　　中〜卿具平親王

夕くれはをき吹風のおとまさる
いまはた如何にねさめせられん（303）

後徳大寺左大臣

ゆふされはをきの葉むけを吹風に
ことそともなくなみたをちけり（304）

崇徳院に百首哥たてまつり
ける時

皇太后宮大夫俊成

おきの葉もちきりありてや秋風の
おとつれそむるつまとなるらむ（305）

題不知

七条院権大夫

あきゝぬと秋吹かせもしらせけり
かならすをきのうはゝならねと（306）

題をさくりてこれかれ哥読せ
るにしのたのもりの秋風をよめる

藤原経衡

日をへつゝをとこそまされいつみなる
しのたのもりのちゝ（え）の秋かせ（307）

百首哥に

式子内親王

うたゝねのあさけの袖にかゝるなる
ならすあふきの秋のはつかせ（308）

題不知

相模

てもたゆくならすあふきのをき
ところわするはかりに秋風そふく（309）

大貳三位

秋風は吹むすへともしらつゆの
みたれてをかぬ草の葉そなき（310）

曽祢好忠

あさほらけをきのうはゝの露みれは
やゝはたさむし秋のはつかせ（311）

小野小町

吹むすふ風はむかしの秋なから
ありしにもにぬそてのつゆかな（312）

延喜御時月次屏風に

紀貫之

おほそらをわれもなかめてひこほ　」〈79オ〉
しのつまゝつよさへひとりかもねむ（313）

題不知

赤人

このゆふへふりくる雨はひこほしの
とわたるふねのかひのしつくか（314）

権大納言長家

としをへてすむへきやとのいけ水は
ほしあひのかけもおもなれやせむ（315）

花山院御時七夕哥つかまつりけるに

藤原長能

袖ひちてわかてにむすふ水のおもに　」〈79ウ〉
あまつほしあひのそらをみるかな（316）

七月七日七夕まつりする所にて
よみける

祭主輔親

雲まよりほしあひのそらをみわたせは
しつこゝろなきあまのかはなみ（317）

七夕哥とてよみ侍ける

大宰大貳高遠

たなはたのあまのはころもうちかさね　」〈80オ〉
ぬる夜すゝしきあき風そ吹（318）
なれぬれはつらき心もありやとて
たなはたつめのまれにちきりし〔1998〕

小弁

たなはたのころものすそは心して
ふきなかへしそ秋のはつ風（319）

皇太后宮大夫俊成

たなはたのとわたるふねのかちのはに
いく秋かきつ露のたまつさ（320）

百首哥中に

なかむれはころもてすゝしひさかたの
あまのかはらの秋のゆふくれ（321）

家に百首哥読侍けるとき

入道前関白太政大臣

如何はかり身にしみぬらむ七夕の
つまゝつよひのあまのかはかせ（322）

七夕のこゝろを

権中納言公経

ほしあひのゆふへすゝしきあまの河
もみちのはしをわたる秋風（323）

」〈81オ〉

待賢門院堀川

たなはたのあふせたえせぬ天河
いかなる秋かわたりそめけん（324）

女御徽子女王

わくらはにあまのかはなみよるなから
あくるそらにまかせすもかな（325）

大中臣能宣朝臣

いとゝしく思けぬへしたなはたの
わかれのそてにをけるしらつゆ（326）

中納言兼輔家屏風に

貫之

たなはたはいまやわかるゝあまのかは
かはきりたちてひとりなくなり（327）

堀河院御時百首哥中にはきを

よみはへりける

前中納言匡房

かはみつにしかのしからみかけてけり
うきてなかれぬ秋はきの花（328）

題不知

従三位頼政

かりころも我とはすらしつゆし
けきのはらのはきのはなにまかせて（329）

」〈82オ〉

権僧正永縁

秋はきをおらてはすきしつき草の
花すりころもつゆにぬるとも（330）
守覚法親王五十首哥よませ
侍けるに
顕照法師
はきか花まそてにかけてたかまと
のをのえのみやにひれふるやたれ（331）」〈82ウ〉
祐子内親王家紀伊
おくつゆもしつ心なき秋風に
みたれてさけるまの丶はきはら（332）
人丸
秋はきのさきちるのへのゆふつゆにぬれ
つ丶きませよはふけぬとも（333）
中納言家持
さをしかのあさたつのへの秋はきに
たまとみるまてをけるしらつゆ（334）
凡河内躬恒
秋の丶をわけゆくつゆにうつりつ丶
わかころもてははなのかそする（335）」〈83オ〉
小野小町
たれをかもまちの山のをみなへし
あきとちきれる人そあるらし（336）
藤原元真
をみなへしのへのふるさと思いて丶
やとりしむしのこゑやこひしき（337）
千五百番哥合に
左近中将良平
ゆふされはたまちる野邊の女郎花
まくらさためぬ秋かせそふく（338）」〈83ウ〉
蘭をよめる
公猷法師
ふちはかまぬしはたれともしらつゆの
こほれてにほふのへのあき風（339）
崇徳院百首哥たてまつりける時
清輔朝臣
うすきりのまかきのはなのあさしめり

秋はゆふへとたれかいひけむ（340）」〈84オ〉

入道前関白太政大臣右大臣に侍けるとき百首哥よませ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖はしほれしのへにいて、むかしも秋のはなはみしかと（341）

築紫に侍ける時秋野、をみてよみ侍ける

中納言経信

花見にとひとやりならすのへにきてこゝろのかきりつくしつる哉（342）」〈84ウ〉

題しらす

曽祢好忠

をきてみんと思しほとにかれにけりつゆよりけなるあさかほのはな（343）

貫之

山かつのかきをにさけるあさかほはしの、めならてあふよしもかな（344）

坂上是則

うらかる、あさちかはらのかるかやのみたれてものを思ふころかな（345）」〈85オ〉

人丸

さをしかのいるの、す、きはつを花いつしかいもかたまくらにせむ（346）

よみ人しらす

おくら山もとの、への花す、きほのかにみゆる秋のゆふくれ（347）

女御徽子女王

ほのかにもかせはふかなむ花す、きむすほ、れつ、つゆにぬるとも（348）」〈85ウ〉

百首歌に

式子内親王

花す、きまた露ふかしほにいて、なかめしと思ふ秋のさかりを（349）

攝政太政大臣百首哥よませ侍けるに

八条院六條

野へことにをとつれわたる秋風をあた
にもなひく花すゝきかな（350）
和哥所哥合に朝草花といふことを
左衛門督通光
あけぬとてのへより山にいるしかの
あとふきをくるはきのした風（351）
題不知
前大僧正慈圓
身にとまるおもひをゝきのうはゝ
にてこのころかなしゆふくれのそら（352）
崇徳院御時百首哥めしけるに
萩を
大蔵卿行宗
身の程を思つゝくる夕くれのをき
のうはゝにかせわたるなり（353）　」〈86ウ〉
秋哥よみはへりけるに
源重之女
あきはたゝものをこそ思へつゆかゝる
をきのうゑふくかせにつけても（354）
堀川院に百首哥たてまつりける時
藤原基俊
秋風のやゝはたさむくふくなへに
をきのうはゝのをとそかなしき（355）
百首たてまつりし時
攝政太政大臣　」〈87オ〉
をきの葉にふけはあらしの秋なるを
まちける夜はのさをしかのこゑ（356）
をしなへて思しことのかす〳〵に
なをいろまさるあきのゆふくれ（357）
題不知
くれかゝるむなしきそらの秋をみて
おほえすたまるそてのつゆかな（358）
家に百首哥合し（に）侍けるに
ものをもはてかゝるつゆやはそてに
をくなかめてけりなあきの夕くれ（359）　」〈87ウ〉
男共詩をつくりて哥に合侍

しに山路秋行といふことを

前大僧正慈圓

みやまちやいつより秋のいろならむ
み●(さカ)りし雲のゆふくれのそら（360）

題不知

寂蓮法師

さひしさはそのいろとしもなかりけり
まきたつ山の秋のゆふくれ（361）

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり
しきたつさはの秋のゆふくれ（362）

西行法師すゝめて百首哥よ
ませはへりけるに

藤原定家朝臣

みわたせは花もゝみちもなかりけり
うらのとや(ま)の秋のゆふくれ（363）

五十首歌たてまつりし時

藤原雅経

たえてやは思ありともいかゝせん
むくらのやとの秋のゆふくれ（364）

秋哥とてよみ侍ける

宮内卿

おもふことさしてそれとはなきもの
をあきのゆふへをこゝろにそとふ（365）

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらし
たゝわれからのつゆのゆふくれ（366）

西行法師

おほつかな秋はいかなるゆへのあれは
そゝろに物ゝかなしかるらむ（367）

式子内親王

それなからむかしにもあらぬ秋風
にいとゝなかめをしつのをたまき（368）

題不知

藤原長能

ひくらしのなくゆふくれそうかり

」〈88オ〉

」〈88ウ〉

」〈89オ〉

けるいつもつきせぬ思ひなれとも（369）

和泉式部

あきくれはときはの山の松かけも（せ）　」〈89ウ〉

うつるはかりにみにそしみける（370）

曽祢好忠

あきかせのよもに吹くるおとはやま

なにの草木かのとけかるへき（371）

相模

あかつきのつゆはなみたもとゝまらて

うらむる風のこゑそのこれる（372）

法性寺入道前関白太政大臣家哥合

に野風

藤原基俊　」〈90オ〉

たかまとののちのしのはらすゑさ

はきそゝや木からしけふ吹ぬなり（373）

千五百番哥合に

右衛門督通具

ふか草のさとの月かけさひしさも

すみこしまゝの野邊の秋風（374）

五十首たてまつりし時杜

間月といふことを

皇太后宮大夫俊成女

おほあらきのもりの木のまをもりかね／て」〈90ウ〉

人たのめなる秋の夜の月（375）

守覚法親王五十首哥よませ侍けるに

藤原家隆朝臣

ありあけの月まつやとのそてのうへ

にひとたのめなるよひのいなつま（376）

攝政太政大臣家百首哥合に

藤原有家朝臣

かせわたるあさちかすゑのつゆにたに

やとりもはてぬよひのいなつま（377）

水成瀬にて十首哥たてまつり／し時　」〈91オ〉

左衛門督通光

むさし野やゆけとも秋のはてそ

なきいかなる風かすゑに吹らむ（378）

百首哥たてまつりし時月哥

前大僧正慈圓

いつまてか涙くもらて月はみし
秋まちゑてもあきそ恋しき（379）

式子内親王

なかめわひぬ秋よりほかのやともかな
野にも山にも月やすむらん（380）　」〈91ウ〉

題しらす

圓融院御哥

月かけのはつ秋風にふけゆけは
心つくしに物をこそ思へ（381）

三条院御哥

あしひきの山のあなたにすむ人は
またてや秋の月をみるらむ（382）

雲間微月といふことを

堀川院御哥

しきしまやたかまとやまの雲まより
ひかりさしそふゆみはりの月（383）　」〈92オ〉

題不知

堀川右大臣

人よりも心のかきりなかめつる
月はたれともわかしものゆへ（384）

橘為仲朝臣

あやなくもくもらぬよひをいとふ
かなしのふのさとの秋の夜の月（385）

法性寺入道前関白太政大臣

かせふけはたまちるはきのしたつゆ／に　」〈92ウ〉
はかなくやとるのへの月かけな（386）

従三位頼政

こよひたれすゝ吹風をみにしめて
よし野ゝたけの月をみるらむ（387）

法性寺入道前関白太政大臣家に

月哥あまたよみはへりけるに

大宰大貳重家

月みれはおもひそあえぬ山たかみ
いつれのとしのゆきにかあるらむ（388）

和哥所の哥合に湖邊月といふ　」〈93オ〉
ことを
藤原家隆朝臣
にほのうみや月のひかりのうつろ
えはなみの花にも秋はみえけり（389）
百首哥たてまつりし時
前大僧正慈圓
ふけゆかはけふりもあらしゝほかま
のうらみなはてそ秋の夜の月（390）
題不知
皇太后宮大夫俊成女　」〈93ウ〉
ことはりの秋にはあえぬなみたかな
つきのかつらもかはるひかりに（391）
藤原家隆朝臣
なかめつゝおもふもさひしひさかたの
月のみやこのあけかたのそら（392）
五十首哥たてまつりし時月
前草花
攝政太政大臣
ふるさとのもとあらのこはきさきし
より夜な〳〵にはの月そうつろふ（393）　」〈94オ〉
建仁元年三月哥合に山家秋月
といふことを読はへりし
ときしもあれふるさと人はおとも
せてみやまの月に秋風そふく（394）
八月十五夜和哥所哥合に深山
月といふことを
ふかゝらぬとやまのいほのねさめ
たにさそなこのまの月はさひしき（395）
月前秋風
寂蓮法師　」〈94ウ〉
月はなをもらぬ木のまもすみよし
の松をつくして秋風そ吹（396）
鴨長明
なかむれはちゝに物おもふ月にまた
我身ひとつのみねの松風（397）

山の月といふことを読侍ける

藤原秀能

あしひきの山ちのこけはつゆのうへに
ねさめよふかき月をみるかな（398）

八月十五夜和哥所哥合に海邊
秋月といふことを」〈95オ〉

宮内卿

こゝろあるおしまのあまのたもと
かな月やとれとはぬれぬものから（399）

宜秋門院丹後

わすれしななにはの秋のよはのそら
ことうらにすむ月はみるとも（400）

鴨長明

松しまやしほくむあまの秋の袖
月は物思ふならひのみかは（401）

題しらす
」〈95ウ〉

七条院大納言

ことゝはむのしまかさきのあまころも
なみと月とにいかゝしほるゝ（402）

和哥所哥合に海邊月を

藤原家隆朝臣

秋夜の月やをしまのあまのはら
あけかたちかきおきのつりふね（403）

題不知

前大僧正慈圓

うき身にはなかむるかひもなかり
けり心にくもる秋のよの月（404）

大江千里

いつくにかこよひの月のくもるへき
おくらのやまもなをやかふらむ（405）

源道済

心こそあくかれにけれ秋の夜の
よふかき月をひとりみしより（406）

上東門院小少将

かはらしなしるもしらぬも秋の夜／の
月まつ程のこゝろはかりは（407）
」〈96ウ〉

和泉式部

たのめたる人はなけれと秋の夜は
月みてぬへき心ちこそせね（408）

月をみてつかはしける　藤原範永朝臣

みる人のそてをそしほる秋のよは
月にいかなるかけかそふらむ（409）

かへし　相模

身にそへるかけとこそみれ秋の
月そてにうつらぬをりしなけれは（410）

」〈97オ〉

永承四年内裏哥合に　大納言経信

月かけのすみわたるへ(かな)きあまのはら
雲吹はらふよはの嵐に（411）

題不知　左衛門督通光

たつた山よはにあらしの松吹は
くもにはうときみねの月かけ（412）

」〈97ウ〉

崇徳院御時百首哥たてまつりけるに　左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲のたえまより
もりいつる月のかけのさやけさ（413）

題不知　道因法師

山のはに雲のこ(よ)きるよひのまは
いてゝも月そ猶またれける（414）

殷冨門院大輔

なかめつゝ思ふにぬるゝたもとかないく

」〈98オ〉

夜かはみんあきの夜のつき（415）

式子内親王

よひのまにさてもねぬへき月ならは
山のはちかき物は思はし（416）

ふくるまてなかむれはこそかなし
けれおもひもいれし秋の夜の月（417）

五十首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を
松にのこして月をみるかな（418）

家に月五十首哥よませ侍ける時

月たにもなくさめかたき秋の夜の
こゝろもしらぬまつのかせかな（419）

定家朝臣

さむしろやまつよの秋のさ夜ふけ／て
月をかたしく宇治のはしひめ（420）

題不知

右大将忠経

あきの夜のなかきかひこそなかりけれ
まつにふけぬるありあけの月（421）

五十首哥たてまつりし時野住月

攝政太政大臣

ゆくすゑはそらもひとつのむさし
野に草のはらよりいつる月かけ（422）

雨後月

」〈98ウ〉

宮内卿

月をなをまつらむものかむらさ
めのはれゆく雲のすゑのさと人（423）

題しらす

右衛門督通具

秋の夜はやとかる月もつゆなから
そてに吹こすおきのうは風（424）

源家長

秋の月しのにやとかるかけたけて
をさゝかはらにつゆふけにけり（425）

元久元年八月十五夜和哥所
にて田家見月といふことを

前大政大臣

かせわたるやまたのいほをもるつゆや
ほなみにむすふこほりなるらむ（426）

和哥所哥合に田家月といふ事を

前大僧正慈圓

かりのくるふしみのをたに夢さ

」〈99ウ〉

」〈99オ〉

」〈100オ〉

めてねぬ夜のいほに月をみるかな（427）

皇太后宮大夫俊成女

いなはふくかせにまかせてすむ

いほは月そまことにもりあかし／ける（428）」〈100ウ〉

題不知

あくかれてねぬよのちりのつもる

まて月にはらはぬとこのさむしろ（429）

大中臣定雅

秋のたのかりねのとこのいなむしろ

月やとれともしけるつゆかな（430）

崇徳院御時百首哥めしけるに

左京大夫顕輔

秋田のいほさすしつのとまをあらみ

月と丶もにやもりあかすらむ（431）

百首哥たてまつりし秋歌

式子内親王

秋の色はまかきにうとくなりゆけと

たまくらなる丶ねやの月かけ（432）

」〈101オ〉

秋の哥の中に

太上天皇

秋の露やたもとにいたくむすふ

らむなかき夜あかすやとる月かな（433）

千五百番哥合に

左衛門督通光

さらにまたくれをたのめとあけに

けり月はつれなき秋のよのそら（434）

」〈101ウ〉

経房卿家哥合に暁月の心を

ふもとをはうちのかはきりたちこめて

雲ゐにみゆるあさひ山かな（秋下・494）

題不知

曽祢好忠

やまさとにきりのまかきのへたてすは

をちかた人のそてもみてまし（495）

清原深養父

なくかりのねをのみそきくをくら山

きりたちはる丶ときしなけれは（496）

人麿

かきをなるおきの葉そよき秋
風の吹なるなへにかりそなくなる（497）
秋かせに山とひこゆるかりかねの
いやとをさかりくもかくれつゝ（498）

凡河内躬恒

はつかりのは風すゝしくなるなへに
たれかたひねの衣かへせぬ（499）

読人不知

かりかねは風にきをひてすくれとも
わかまつ人のことつてもなし（500）

西行法師

よこ雲のかせにわかるゝしのゝめに
やまとひこゆるはつかりのこゑ（501）
しら雲をつはさにかけてゆくかり
のかとたのをものともしたふなる（502）

五十首哥たてまつりし時月前

聞鴈といふことを

」〈102オ〉

前大僧正慈圓

おほえやまかたふく月のかけさゑて
とはたのをもにをつるかりかね（503）

」〈103オ〉

題不知

朝恵法師

むら雲やかりのは風にはれぬらむ
こゑきくそらにすめる月かけ（504）

皇太后宮大夫俊成女

吹まよふ雲ゐをわたるはつかりの
つはさにならすよものあきかせ（505）

詩に合し哥の中に山路秋行

といへることを

家隆朝臣

うらかれてゆくのへの秋風（516）

」〈103ウ〉

秋哥とて

太上天皇

あきふけぬなけやしもよのきり
きりすやゝかけさむしよもきうの／月（517）

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

きり〳〵すなくやしも夜のさむしろに
ころもかたしきひとりかもねむ（518）

千五百番哥合に

東宮権大夫公継

ねさめするなかつきの夜のとこさむみ
けさ吹かせにしもやをくらむ（519）

和哥所にて六首哥つかうまつ
りし時秋哥

前大僧正慈圓

秋ふかきあはちのしまのありあけ
にかたふく月をゝくるうら風（520）

暮秋こゝろを

なか月もいく有明になりぬらむ
あさちの月のいとゝさひゆく（521）

攝政太政大臣大将に侍ける時百首
哥よませはへりけるに

」〈104オ〉

」〈104ウ〉

寂蓮法師

かさゝきの雲のかけはし秋くれて
夜はにはしもやさえわたるらん（522）

さくらのもみちはしめたるをみて

中務卿具平親王

いつのまにもみちしぬらむ山さくら
きのふははなのちるをゝしみし（523）

紅葉透霧といふことを

高倉院御哥

うすきりのたちまよふ山のもみち
葉ゝさやかならねとそれとみえけり（524）

秋哥とてよめる

八条院高倉

神なひのみむろのこすゑいかならむ
なへての山もしくれするころ（525）

最勝四天王院の障子にすゝ
か川かきたる所

」〈105オ〉

」〈105ウ〉